

1. 授業のねらい・概要

日本経済の低迷が論じられるようになって久しい。中国を筆頭とするアジア諸国の経済成長をうけて世界経済における日本の地位低下傾向を嘆き恐れ、さらなる経済成長による失地挽回を目指さなければならないとする風潮は年々強まっている。そうした風潮は国内社会経済構造の「改革」圧力として機能する一方で、新たな矛盾を作り出しているように見える。

しかしながら、日本が世界上位の「経済大国」としての地位を占めているのはたかだかここ 30 年ほどの事象に過ぎないし、「経済成長」が社会全体で目指すべき自明の目的と位置付けられること自体があくまで歴史的現象に過ぎない。しかも、そこに至る歴史過程においては様々な分岐点を経てきた（すなわち様々な歴史的 가능성을切り捨ててきた）のであって、その都度多くの矛盾が生み出され堆積してきたのである。日本経済に対する現状認識は、そうした歴史認識を基礎として形成されなければならない。本講義は以上のような問題関心のもと、日本経済の歴史的展開について事実 に即して構造的に理解することを目指している。

前期の日本経済史 A では近代日本経済史を扱う。

2. 授業の進め方

テキストを受講者同士で精読しながら、日本における高度成長の展開を理解していく。とりわけ重要な用語・概念は重点的に解説する。テキストを補完する必要がある点については、別途資料を配布して論じる。

3. 授業計画

1. イントロダクション	9. 税権・商権の回復
2. 幕末開港と日本	10. 第一次大戦と日本経済
3. 明治維新と地租改正	11. 1920 年代の日本経済
4. 殖産興業	12. 井上財政
5. 松方デフレ	13. 高橋財政
6. 産業革命	14. 戦時経済統制
7. 近代産業、在来産業、農業	15. 敗戦と戦後改革
8. 日清・日露戦争	

4. 到達目標

今日の日本経済の歴史的背景を理解し、他者に対して文章・口頭で説明することができるようになること。

5. 準備学修に必要な時間、またはそれに準じる程度の具体的な学修内容

テキストを熟読するとともに知らない用語について意味を調べ、毎回配布する課題プリントに取り組むこと。

6. 成績評価の方法・基準

毎回提出する課題、レスポンスペーパーおよび試験によって評価する。

予習・復習を含め、講義への主体的な参加の程度が評価の対象となる。

7. テキスト・参考文献

【テキスト】市川大祐『歴史はくり返すか 近代日本経済史入門』（日本経済評論社、2015 年）。

8. 受講上の留意事項

毎回の講義に向けて、日常的にテキストの予習を行うこと。

講義にはテキストを必ず持参すること。

後期の日本経済史 B を併せて受講することが望ましい。

1. 授業のねらい・概要

日本経済の低迷が論じられるようになって久しい。中国を筆頭とするアジア諸国の経済成長をうけて世界経済における日本の地位低下傾向を嘆き恐れ、さらなる経済成長による失地挽回を目指さなければならないとする風潮は年々強まっている。そうした風潮は国内社会経済構造の「改革」圧力として機能する一方で、新たな矛盾を作り出しているように見える。

しかしながら、日本が世界上位の「経済大国」としての地位を占めているのはたかだかここ 30 年ほどの事象に過ぎないし、「経済成長」が社会全体で目指すべき自明の目的と位置付けられること自体があくまで歴史的現象に過ぎない。しかも、そこに至る歴史過程においては様々な分岐点を経てきた（すなわち様々な歴史的可能性を切り捨ててきた）のであって、その都度多くの矛盾が生み出され堆積してきたのである。日本経済に対する現状認識は、そうした歴史認識を基礎として形成されなければならない。本講義は以上のような問題関心のもと、日本経済の歴史的展開について事実 に即して構造的に理解することを目指している。

後期の日本経済史 B では現代日本経済史を扱う。

2. 授業の進め方

テキストを受講者同士で精読しながら、日本における高度成長の展開を理解していく。とりわけ重要な用語・概念は重点的に解説する。テキストを補完する必要がある点については、別途資料を配布して論じる。

3. 授業計画

1. イン트로ダクション	9. 1970 年代の日本経済①—政治的条件と経済政策
2. 戦後改革	10. 1970 年代の日本経済②—経済動態
3. 戦後復興	11. 1970 年代の日本経済③—産業と消費
4. 高度経済成長①—政治的条件と経済政策	12. プラザ合意
5. 高度経済成長②—経済動態	13. バブル経済
6. 高度経済成長③—産業と消費	14. 「失われた 10 年」の内実
7. 列島改造論	15. 2000～2010 年代の日本経済
8. 高度成長の終焉	

4. 到達目標

今日の日本経済の歴史的背景を理解し、他者に対して文章・口頭で説明することができるようになること。

5. 準備学修に必要な時間、またはそれに準じる程度の具体的な学修内容

テキストを熟読するとともに知らない用語について意味を調べ、毎回配布する課題プリントに取り組むこと。

6. 成績評価の方法・基準

毎回提出する課題、レスポンスペーパーおよび試験によって評価する。

予習・復習を含め、講義への主体的な参加の程度が評価の対象となる。

7. テキスト・参考文献

【テキスト】板垣暁『日本経済はどのように歩んできたか 現代日本経済史入門』（日本経済評論社、2016 年）。

8. 受講上の留意事項

毎回の講義に向けて、日常的にテキストの予習を行うこと。

講義にはテキストを必ず持参すること。

前期の日本経済史 A を併せて受講することが望ましい。